

私が教えられた 患者・利用者さんたち



左手の物語

川本 愛一郎

(南リハシップあい)

現在、筆者は、通所介護：2事業所、単独型訪問看護ステーション：1事業所を有限会社の形態で運営しています。デイサービスや訪問リハで日々をともに笑いながら楽しく過ごすひとときは、何にも代えがたい大切な時間です。

今回紹介するのは、週1回の訪問リハと週1回のデイサービスを利用されている70代男性の「左手の物語」です。元漁師で2年前に脳卒中で四肢麻痺になられ、現在要介護5、ADL全介助、気管切開、胃ろう造設、奥様と娘さんの献身的な介護のもと在宅生活をされています。

左上肢のみ、わずかに随意性が保たれ、意思表示は、瞼の開閉、左手でのジェスチャーと書字でされています。訪問リハ時、天気の良いときは、電動車いすを左手で操作され、自宅周囲をOTの見守りで散歩されています。

ある日の夕方、ご主人がしきりに左手を動かして奥様と娘さんに何か伝えていたそうです。二人は、どうも何かを飲みたいことまではわかったそうです。しかし、飲みたいものが何かわからないので、ベッドを起こして字を書いてもらったそうです。運動失調もあるので一生懸命書くのですが、よくわからなかったそうです。かろうじて“サ”という文字が判別でき、それから奥様と娘さんの連想ゲームでした。そして、ひらめいたのが「酒」だったそうです。娘さんが「酒？」と聞くと、お父さんは大喜びしたそうです。

病前は、決してお酒が強いわけではなく、ビール350ml缶を家族3人で分けて飲むくらいだったそうです。まさか、「お酒」が飲みたいとは……、それらもう飲みたいのは日本酒。奥様も娘さんも驚いたそう



デイサービスでの書字場面

です。

でもご主人は、娘さんが大急ぎで近くの酒屋さんで買ってきたワンカップ大関を楽飲みで一口二口飲ませてもらい、顔を真っ赤にしながらもご満悦だったそうです。今は、ワンカップ大関が晩酌の定番だそうです。主治医も気分転換になるからいいよ、と楽飲み晩酌を認めてくれました。

現在、県内のOT養成校の2年生が評価実習で、当デイセンターに来ています。筆者の訪問リハに同行し、今回紹介したご利用者様の左上肢のGMT、ROM、電動車いすの操作、Br-stage、DTR、病的反射等、一連の評価をしてもらいました。一連の評価技術を習得することも大切ですが、何より筆者が実習生に感じてほしかったのは、その方のお酒を飲みたい気持ちと、「左手」が織りなす生きることの「物語」です。

私たちOTは、手が織りなす作業を通して、患者様、利用者様一人ひとりの「物語」に深く関わっていることを、この方からあらためて教えられました。

【かわもと あいichろう：1984年社会医学技術学院卒業。同年4月より出水市立病院勤務。1995年3月鹿児島県作業療法士会会長就任（～2005年5月まで）。1999年4月言語聴覚士国家資格取得。2004年2月南リハシップあい設立】